

主棟・茶室について

松韻亭の設計は、谷口吉生さんが手がけました。西洋では 2004 年に再オープンしたニューヨーク近代美術館（新館）の設計で最も知られている建築家です。利用予約ができる 2 部屋の畳敷きの広い和室（広間）のほか、予約なしで訪れる人々や茶道教室向けに、椅子とテーブルのあるスペース、畳敷きのスペースを備えた部屋も設けられています。

入口へは、屋根のついた木の門を通ったあと、池の向こうの石段へと続く幅の広い道に沿って行きます。石段の先は主棟に通じる石畳になっています。駐車場に通じているもうひとつの入口は外壁にある小さな木戸をくぐります。低い木戸なので来訪者は頭を低くしてくぐらなければなりません。これは伝統的な茶室の低い入口（にじり口）を模倣しており、茶席に集う者は皆平等と考えられていることの表れです。玄関まで曲がりくねった道を通っていくので、玄関に着くまでの間に思索し、外界のストレスを解放する時間ができます。

主棟・松韻亭に入ると、大きなガラス張りの障子越しに庭園を眺めることができます。広間を予約してある来訪者は 2 部屋の畳敷きの和室（広間）の前にある縁側に入ることもできます。主棟では壁と天井に国産のスギ材やクリ材を精巧に加工した部材を使っており、自然光の入る室内は、庭園と調和しています。谷口さんが松韻亭に込めたミニマリストの概念は、茶道の簡素な美意識を引き立てています。